地域みんなで子供たちの未来を考えるワークショップのすすめ

── 地域とともにある学校づくりに向けて ──

文部科学省委託事業
「学校の総合マネジメント力の強化に関する調査研究」

制作●株式会社ノースプロダクション
〒089-5601　北海道十勝郡浦幌町字宝町 53-26
TEL：015-576-4678
FAX：015-576-3772
E-mail：edn@north-production.co.jp

協力●みらいず works

学校×地域の
協働の気運を高めるために

学校×地域の協働が求められる背景

子供たちの「生きる力」は、多様な人々と関わり、様々な経験を重ねて行く中で育まれるものです。学校だけで育まれるものではありません。子供たちは地域社会とのつながりの中で、絆を育み、豊かさ・たくましさを身につけていきます。つまり、子供たちの確かな育ちを保障するには、信頼できる大人との多くの関わりが不可欠だと言えるでしょう。子供たちが豊かで健やかな成長を遂げるために、また現在の学校や子供たちが抱える課題や家庭・地域社会が抱える課題等を解決していくためにも、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしつつ、社会総掛かりでの教育の実現がいまこそ必要です。そしてそのことが「地域とともにある学校づくり」にもつながっていきます。そのためには、まずは、学校と地域それぞれが互いを理解し合うことが大切です。そして「学校」と「地域」が協働体制を確立していくことが求められてきます。本パンフレットは、平成２６年度文部科学省委託事業「学校と地域の協働体制を確立するためのプログラム開発～学校の総合マネジメント力強化に関する調査研究」で作成されたものです。学校×地域の協働への気運を高めることを目指して作られております。本パンフレットの活用から、「学校×地域の協働」のきっかけが作られればと願うとともに、全国各地で子供たちのために日々奮闘されている学校長はじめ教職員の皆さんそして教育委員会職員など教育関係者の皆さんが「学校×地域の協働」を進めるヒントを感じて頂けたらと期待しております。

協働に必要なことは、「熟議」と「マネジメント」

「協働」はとても大切な概念です。そして学校と地域が協働していくことは大事なことです。しかし協働は、第三者からの要請で築いていくものではありません。必要性の中から自ずと育まれていくものだと考えられます。異なる立場にあるものどうしが、互いの立場や特性を分かり合い、その上で学び合い、力を出し合い、そして互いが変わっていく姿を見ることで自らも変わろうとする、そんな姿が協働の原点ではないでしょうか。学校と地域の協働を考えた場合、地域と学校に関わる多様な立場の人たちが参加し、「関わって良かった！」と実感できる結果につながるような熟議のテーブルを作ることが大切です。本パンフレットでは、全国各地で先進的に進んでいる協働事例とそこに携わる方たちからの知見をもとに開発された「熟議を基盤に学校と地域が協働していく気運を高めるワークショッププログラム」を紹介しております。そして本ワークショップは、明確な到達目標を設定した研修のような性質のものではなく、プログラムの実施を通して、あくまでも結果として自然発生的に協働への気運が高まることを目指し作成しました。またプログラムを全国どこでも使えることを想定し、運営にあたってのポイントを紹介しております。そして最後に実際にこのワークショッププログラムを活用した地域の事例を紹介しております。本質的な協働体制を構築するには、「熟議」だけではなく、熟議から育まれる新たな関係性を軸に実際に行動にうつしていく等といった、より良いカタチに発展させる「マネジメント力」が必要です。そこへのヒントをぜひ、実践事例より掴んで頂けたら幸いです。次頁から具体的に紹介していきます。

学校協働のメリットとは？

子供・保護者にとって

◎地域のいろいろな人が学校に関わるため、学びに多様性が生まれます。

◎地域の大人に見守られることで、子供が地域とのつながりを実感し、安心感が生まれます。

学校の教員にとって

◎地域との信頼関係が深まり、教育に参加してもらうことで、教育活動に厚みを生み出せます。

◎地域に目を向けて、多様な人々と関わる経験は、教員の知見を広げることにもなり、指導力の向上が期待できます。

地域の人々にとって

◎子供たちが地域の一員という意識を深め、ふるさとへの愛情が深まります。

◎地域の人々がつながる場として学校が機能することで、地域のネットワークが形成されます。

地域みんなで子供の未来を考えるワークショップに取り組む

本ワークショップでは、学校と地域の関係者がコミュニケーションを深めながら、取り組まれることによって、結果として「協働」への気運につながることを目指して組み立てられています。またワークショップの実施主体は学校×地域の協働への気運を高めることを期待する学校や教育委員会を想定しております。このページでは「協働の気運を高めるために」作られたワークショップの「概要」「特徴」「ポイント」について説明します。

ワークショップの概要

ワークショップのテーマは、「地域みんなで子供の未来を考える」です。子供たちは未来の宝です。学校及び地域の様々な立場の方たちが一緒になって子供の未来を考えることはとても大切なことであるのと同時に、学校と地域が同じテーブルで熟議するには最適なテーマと言えます。「導入ワーク」で話しやすい環境をつくり、「子供の未来をめぐるビジョンの共有」「ビジョン共有に向けたアイデア出し」がワークショップの中核となります。

そしてワークショップをただ実施するのではなく、「学校×地域の協働」につなげていくためには、「地域とともにある学校づくり」の推進を目指しこのワークショップを企画した主催者代表、例えば「学校」であれば学校長が、「教育委員会」であれば教育長が、ワークショップの発表を聞き、「主催者挨拶」として感想をスピーチすることが大切です。子供の未来を考え学校×地域の協働作業で生み出されたアイデアは素晴らしいものばかりです。もしそれらを讃え認めるようなコメントを主催者が話されたのならば、それを聞いた参加者のやりがいにつながり、「参加してよかった！」「自分たちのアイデアが活かされた！」という成功体験から、参加者が「地域とともにある学校づくり」に関わることを前提とした協働意識の向上に大きく寄与していくはずです。また「地域とともにある学校づくり」を推進していく主催者代表の「本気」と「覚悟」をこのスピーチで示せることができれば、学校と地域の協働体制の確立に大きな一歩を踏み出すことになるでしょう。

ワークショップ概要図

◎想定される出席者：小中学校教職員・保護者・PTA関係者・教育委員会職員など
◎実施に係る所要時間：120分

導入ワーク　5分	２人１組になり、握手して挨拶。緊張感をなくして、安心して発言できる雰囲気をつくる。
▼	
子供の未来をめぐるビジョンの共有　20分	地域と学校が一緒に子供を育てる可能性を認識し、それぞれの目指す子供像を共有する。
▼	
ビジョン共有に向けたアイデア出し　70分	グループに分けれ、ビジョン実現のためのアイデア出しを行う。最後に全体で発表・共有する。
▼	
振り返り　20分	参加者全員でアンケート用紙に記載。気づきや感想、意気込みを全体共有し、行動への気運につなげる。
▼	
主催者のスピーチ　5分	発表を聞いての感想や「地域とともにある学校づくり」推進への覚悟と本気を参加者に伝える。

ワークショップの特徴

ワークショップの基本は、人の発言や考えを否定しないことです。しかしながら異なる立場の方たちが集まった場では、時として場の空気が悪くなるような発言が飛び出し、協働とはほど遠い関係性を築いてしまうこともあり得る話です。そんな中、本ワークショップでは、テーマを「地域みんなで子供の未来を考える」としました。地域総掛かりで子供たちの未来を考えることはとても大切なことです。もう一方でこのテーマ設定は、異なる立場の方が集まって熟議しても、自分勝手な発言につながる可能性が低いと考えられます。なぜなら、我々大人たちにとって、子供たちの未来は、何よりも最優先で考えるべき普遍的な価値があるものだからです。「未来の子供たちがどんな風に育ってほしいのか」その願いは人それぞれですが、そのテーマは常に、未来思考であり、前向きな発言につながります。そしてそれぞれの考えを共有することは、集まった方たちの一体感へとつながっていきます。さらに本ワークショップでは、参加者で共有した「子供像（ビジョン）」に近づくために、学校が困っていることを軸に教職員から出された課題を解決していくために、学校と地域が協働し、何ができるのか？アイデア出しを行うことになっています。この流れは、これからの学校と地域が協働して行うべき行動（アクションプラン）への大きなヒントにもつながるはずです。

ワークショップのポイント

1	参加者が緊張することなく、またフラットな関係性の中で自由に発言できる場を作ります。
2	異なる立場の関係者が子供たちを核としたビジョン（未来の子供像）について語り合います。
3	参加者が自由に語り合い、思いや願いを共有する中で、目指す方向性を共有します。
4	参加者は一部の組織や役職者などに偏らず、様々な年齢や肩書き、立場で構成します。
5	学校の困りごとに着目し、「一緒に解決しよう」という意識を高め、一体感やワクワク感、当事者意識を生み出します。
6	参加者全員で気づきや意気込みを共有し、ワークショップの集いが継続していくように気運を高めます。
7	主催者は、参加者からビジョン共有のために出されたアイデア・感想を真摯に受け止めます。
8	主催者は、「地域とともにある学校づくり」の推進に対しての覚悟と本気を参加者に示します。

子供の未来をめぐるビジョンの共有

保護者（PTA 関係者）や地域住民そして教職員で「子供たちがどう育ってほしいか」ビジョン共有を図ります。
それぞれの異なる立場から子供の将来についてどのようなビジョンを描いているのかー。
参加者全員それぞれで考え、それを共有していきます。
同じ方向を向いて子供の未来を語ることがワークショップ前半のテーマです。

プログラムの流れ

導入ワーク　5分

ねらい

緊張感をなくして、安心して発言できる雰囲気をつくる。

流れ

1. 2 人 1 組になり、握手と簡単な自己紹介をした後、子供や地域の自慢をし合う。
2. 自由に歩き回り、3 分以内にできるだけ多くの人とコミュニケーションを取る。

ビジョンの共有　20 分

ねらい

地域と学校が一緒に子供を育てる可能性を認識し、それぞれのめざす子供像を共有する。

流れ

1. 進め方を説明する。
2. テーマを発表する。
3. 一人ひとりがテーマに対する思いを一つ、用紙に記入して回収する。
4. 無作為に抽出し、読み上げられた人は、自己紹介をしてから内容について補足説明をする。
5. 進行役が模造紙に整理し、全体の意見として共有する。

手法 1　アイスブレイク

本題のテーマについて話し合う前のウォーミングアップです。初対面の参加者同士が、握手して自己紹介をすることで、距離感がグッと近づきます。子供や地域に関する「自慢」というお題は、子供の育ちというワークショップのテーマにも関連しています。

手法 2　テーマ設定

参加者全員がビジョンの共有するために、「子供たちがどう育ってほしいか」というテーマを設定しました。意見が多過ぎると共有しづらくなるため、選りすぐりの一つを記入してもらいます。

手法 3　アンケートゲーム

順番に発表するのではなく、くじ引きのように袋の中から取り出して読み上げ、それを記入した人が説明をするという方法にしています。

手法 4　進行役による整理

参加者の意見は、似たものはグループ分けし、それぞれのグループに分かりやすい名称を付けるなど、ホワイトボードに整理して「可視化」します。

進行のポイント

立場の異なる参加者の思いを一つにまとめ、その後のアイデア出しをスムーズに進めるためには、どのような点に心がけてビジョンを共有すれば良いのでしょうか。運営上のポイントを解説します。

ポイント 1　自由に発言できる雰囲気をつくる

ワークショップを活性化させるためには、自分の考えを伝えたくなる雰囲気をつくることが先決です。最初は誰でも、多かれ少なかれ緊張していますから、例えば、握手と挨拶に続いて「自慢」という形で自分の考えを自由に伝える時間を設け、「何を話してもいい」という安心感を抱いてもらえるようにします。自慢の内容を「子供」と「地域」の 2 つにしているのは、教員や保護者は子供、地域住民は地域に関わることが話しやすいからです。

ポイント 2　発表方法にゲーム性を持たせる

ワークショップのベースとなるビジョンは全員で共有することが重要ですから、グループワークではなく、全体で進行します。その分、一人ひとりの発表時間があまり取れませんが、用紙に記入する過程で自分の考えを整理しているため、発表者は手短にポイントを説明することができます。

また、多くの参加者が順番に発表する方法は、単調になりがちで、聞き手の集中力が途切れやすくなります。そこで、くじ引きのような形で発表者を決める手法で、ちょっとした「ドキドキ感」を味わってもらいます。

ポイント 3　発想力を喚起するテーマを設定

テーマ設定は、あらゆる立場の参加者の発想力を喚起するものにすることが大切です。もし、「どのような子供を育てるべきか」といった「べき論」を語るとしたら、決まった正解があるような気持ちになり、自由な発想が促されにくくなります。また、「どのような力を育てたいか」とした場合は、「○○力」といった型に縛られて、思考が制限されやるくなるかもしれません。

ポイント 4　進行役が整理し、全体で共有

進行役が皆の意見をまとめる際には、主観をできるだけ排除するように努めます。一方で、参加者の強い思いが感じられた意見は強調して書くなど、その場の雰囲気を感じ取って話し合いを方向付けるような役割も、時には必要になります。

ビジョン実現のためのアイデア出し

全員で共有したビジョンをベースに「こう育ってほしい」という願いを実現させるために、
学校×地域で一緒になりできることを考え、アイデアを出します。
「実際に一緒にできることを一緒に考える」それがワークショップ後半のテーマです。

プログラムの流れ

アイデア出し　70分

ねらい

共有したビジョンの実現をめざすにあたり、課題を明らかにして、具体的な行動を考えることで、参加者の期待感や当事者意識を高める。

流れ

1. 教員、保護者、地域住民がバランスよく混ざるように、5名ほどのグループを編成する。
2. 学校の課題、教員の困りごと、また子供を取り巻く地域の課題についてグループで話し合う。
3. 教員の困りごとを解決する方法を中心に、学校と地域が一緒にできることを話し合う。
4. グループごとにアイデアを2つ選んで用紙に記入する。
5. 各グループが発表をして全体で共有する。

振り返り　20分

ねらい

気付きや意気込みなどを共有して行動への気運を高めるとともに、小さな行動を生み出す。

流れ

1. 全員がアンケート用紙に記入する。
2. 数名の参加者に感想を発表してもらう。
3. 進行役が集約した内容を話す。

主催者スピーチ　5分

手法1　グループ内で役割分担

話し合いがスムーズに展開するように、グループの進行係である「ホスト役」、発言内容を記録する「記録役」を一人ずつ決めます。

手法2　発表の工夫

雰囲気を盛り上げるために、「せーの！」という掛け声とともに、全員が2回拍手をしてから、発表してもらいます。

手法3　アイデアの整理

進行役がホワイトボードに各グループの用紙を整理して貼り、似たアイデアは囲むなどして全体像を把握しやすくします。

手法4　振り返りのアンケート

ワークショップの満足度や成果などを5段階で評価してもらったほか、自由記述欄を設け、気付きや感想、また「話し合いをもとに明日からできそうなこと」などを記入してもらいます。

進行のポイント

参加者から多様なアイデアを得るためには、発想を阻害する要因を取り除くことが大切です。参加者がワクワクしながら、思いついたことを自由に話せるような環境づくりの工夫を紹介します。

ポイント1　役割分担でグループワークを活性化

グループでの話し合いでは、発言者が偏ることがよくあります。そこで、ホスト役が発言の少ない人に意見を求めるなど、全員がバランス良くアイデアを出せるように配慮しながら進行します。さらに、記録係が発言内容を記録することで、参加者の思いを可視化するとともに、話し合いを通してアイデアを積み上げられるようにしています。

ポイント2　「困りごと」を聞いて、共感の関係を生む

ビジョンの共有後、具体的なアイデアを集める準備段階として、教員の困りごとを中心に現状の把握をします。ただし、ある程度、実態を明確にすることは必要ですが、課題ばかりに目を向けると、アイデア出しの際に「現実的に難しいのでは」といった考えになりやすく、自由な発想を阻害するおそれがあります。そこで、問題点を出し合うのではなく、あくまで「先生が困っていることを聞く」という形にしています。そのほうが、他の参加者が「先生はそういうことに困っていたのか」と気付いたり、「みんなで解決しよう」という気持ちになったり、共感の関係が生まれやすくなる良さもあります。

ポイント3　否定しないから、多様なアイデアが生まれる

アイデアを出し合う上で最も大切なのは、皆が自由に意見を述べられる雰囲気をつくることです。多様な視点からのアイデアが出されることが、教員や保護者、地域住民といった様々な立場の人々が協力することの最大の良さだからです。そのため、どのような意見であっても、否定したり反論したりせず、皆で受け入れることを話し合いのルールとしています。

ポイント4　一人ひとりの行動を促す、振り返りの時間

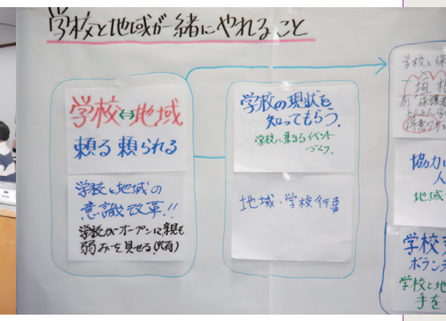
どれだけ素晴らしいアイデアが出されても、その後の行動に結びつかなければ、学校や地域は変わっていきません。「楽しかった」で終わらせずに、一人ひとりの小さな行動を促すために、ワークショップの内容を見直し、「今後、自分に何ができるか」を具体的に考える振り返りの時間を設けます。

実施レポート　その1

実践事例を通して見る「ワークショップの効果」

実際他地域で行われたワークショップでは、保護者・地域住民そして教職員たちでどんな話し合いになったのでしょうか？平成27年1月に北海道浦幌町で行われたワークショップのレポートをご紹介します。

導入ワーク　5分　ビジョンアンケート　20分　アイデア出し　70分　振り返り　20分



導入ワーク

アイスブレイクで前向きなマインドに

浦幌町では、学校や地域の関係者が一堂に会するワークショップは、初の試みでした。最初は、「どのような話し合いをするのだろうか」「地域と学校が一緒になって何ができるのだろうか」などと、不安げな面持ちの参加者もいましたが、自由に歩き回ってコミュニケーションを取る導入ワークが始まると、すぐに打ち解ける姿が見られました。最初に自分の考えを自由に伝える場を設けたことで、その後の話し合いで積極的に発言する心の準備ができたようです。

また、「自慢」をするというお題は、普段はあまり意識しない子供や地域の良さを改めて見つめ直す機会となりました。それにより、子供や地域の未来に対する前向きな気持ちが生まれたことが、「皆で未来を明るくしていこう」というワークショップの雰囲気につながりました。

ビジョンアンケート

ビジョンが共通していることを確認

ワークショップ前半のテーマである「地域の子供がどう育ってほしいか」について、参加者全体でビジョンの共有を図りました。ここでは、実に様々な意見が聞かれました。「どこにいても、自分で考え、行動できる人」「最後まであきらめず、やり抜く強い心」「ふるさとに誇りをもった人」「自分は幸せだと胸を張れる子」……etc. 進行役が、参加者が提示したビジョンをグループ分けし、皆がどのような思いを持っているか、全体を把握できるようにまとめました（P.12 資料１）。

この作業を通して多く聞かれたのが、「気持ちや願いは一緒だ」という声です。立場は異なっても、子供の未来に共通のビジョンを描いていることを確認できました。

また、皆の意見を集約すると、「知・徳・体」といった昔から学校で掲げられている教育目標に近づくことに気付きました。各々がビジョンを語り合う中で結果的に「知・徳・体」に辿りついたことで、これまで意識していなかった従来の教育目標を新鮮な思いで見つめ直すことができたのは、参加者にとって大きな発見でした。

アイデア出し

「ワクワクするアイデアか」を最重視

共有したビジョンをベースとして、学校と地域が一緒にできることを皆で考えました。初めに教員が困りごとを話すと、保護者や地域住民は共感を示したり、「こうすれば解決に近づくかもしれない」と、早速、具体案が提示されるグループもありました。ある教員が「これまで学校だけで何とかしなくてはと思っていたが、地域や家庭に求めてもいいのだと分かった」と語ったように、子供の未来に対する願いは同じなのだから、共に手を携えて子供を育てようという意識が徐々に強まっていく姿が見られました。

課題を掘り起こして「足りないところを直す」のではなく、未来を語る中で「こうなったら素敵だ」というスタンスで進めたことで、前向きな考えが生まれやすくなった面もあったようです。「こんな学校にしたい」「こんなこともできそうだ」など、たくさんのアイデアが飛び交いました。中には非現実的に思えるアイデアもありましたが、それもまた良し。アイデア出しは、「実現可能か」より、「ワクワクするか」を重視して進められました。

続いて、各グループが多くのアイデアの中から、現実的で具体的な案を二つずつ発表。「学校の現状を知ってもらう」「地域人材を学校に紹介できる組織づくり」「ふるさと浦幌の良さをプロから学ぶ」「リレー民泊」などの案が出されました（P.12 資料２）。

振り返り

アクションへの気運が高まった

参加者は、振り返りシートを通して、ワークショップの感想や気付きを振り返り、自分が明日からできることを具体的に考えました。前向きな回答が非常に多く、例えば、「できるところから、地域と学校で何か一緒に取り組んでみたいと思った」という設問では、「当てはまる」「やや当てはまる」の合計は 96.4％に上りました。

ワークショップを通した成果の一つは、学校と地域の思いは同じという信頼関係に基づいたつながりが生まれたことです。教員の困りごとに対し、地域住民が「それについては、○○さんが詳しいから紹介しますよ」とアドバイスするなど、具体的なネットワークが構築されていく瞬間を垣間見ました。

参加者の間に「行動に移したい」という気持ちが強まっていく様子も見られました。それは、「学校として、地域に対してどのようなことを頼れるか、具体的にリストアップする」、「人任せにするのではなく、自分から進んで取り組んでいかなければと思いました」といった声に表れています。

最後に浦幌町教育委員会の教育長から、「皆さんのアイデアを今後の教育活動に生かしていきたい」というお話があり、参加者は、今後、自分たちのアイデアが具体的な改善につながっていくという実感をますます深めたようでした。

■ワークショップの詳細

実施日時：平成27年1月29日（木）16時～18時
実施場所：浦幌町中央公民館２階会議室
参加者：町内 PTA 役員（保護者）・CS 推進委員（地域住民）・教職員約60名
主催者：浦幌町教育委員会

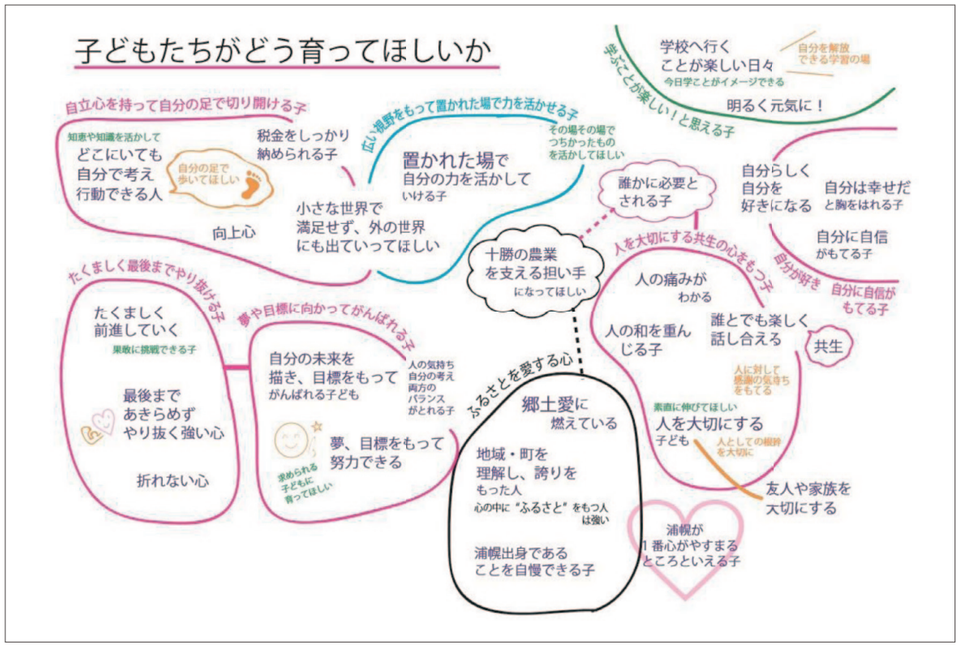
■浦幌町の概要

浦幌町は、人口約 5,100 人の農林漁業が基幹産業の町。しかし近年は少子高齢化が進み、学校も数多く廃校に。（現在は小学校３校、中学校２校、高校は廃校）２年間の準備期間を経て、平成27年度より小中一 貫コミュニティ・スクールを本格導入。ワークショップの実施は、準備期間最後の研修的な位置づけで行われた。

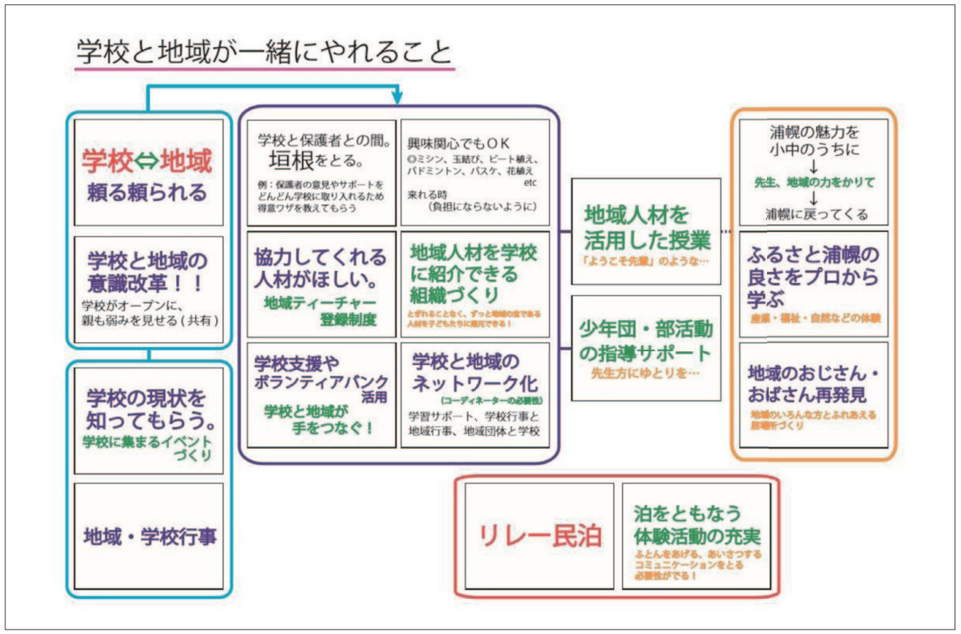
ワークショップの記録

浦幌町のワークショップの記録を掲載します。

資料１「浦幌の子供たちがどう育ってほしいか」参加者が提示したビジョン



資料２ ビジョン実現に向けた参加者のアイデア

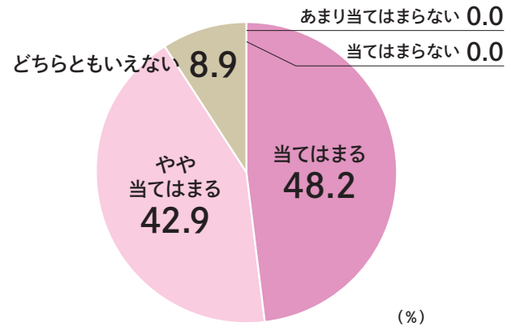


ワークショップに参加した人たちのアンケート結果

浦幌町のワークショップの参加者が記入したアンケートから、一部を紹介します。

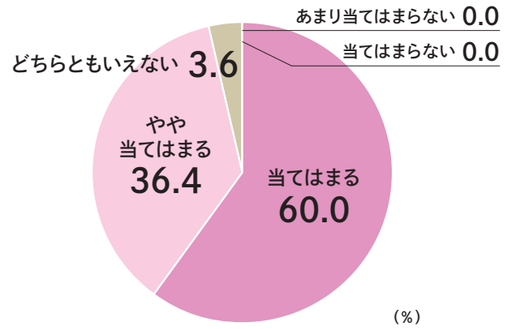
グラフ１

地域と学校が一緒になって子供に関わることのメリットや利点を理解できた。



グラフ２

できるところから、地域と学校で何か一緒に取り組んでみたいと思った。



ワークショップを主催して

浦幌町教育委員会教育長 **久門好行**

浦幌町では、地域総ぐるみで生きる力を育むことを目指し、来年度（平成２７年度）より小中一貫コミュニティ・スクールを導入します。平成２４年度からは、「地域とともにある学校づくり」の先進地である東京都三鷹市などのコミュニティ・スクールを視察したり、先進地の関係者を本町にお呼びして講演会を開催したりして研修を深めてきました。

また、本町ではすでにふるさと教育やキャリア教育を軸とした「うらほろスタイル」という独自のプログラムを実施していますが、このタイミングで学校と地域が協働していくための機運を高めるワークショップの実施は、大変意義深いことだと考えています。学校と地域の人たちが一緒になって目指す子ども像を語り合い、それを実現するための手立てを練り合う「熟議」は、今まであるようでなかった切り口として新鮮なものでした。

ワークショップ後のアンケート集計では、「地域と学校が一緒になって子供と関わることのメリットや利点を理解できた」という問いに対し、９０％以上が「当てはまる」又は「やや当てはまる」と回答し、「できるところから、地域と学校で何か一緒に取り組んでみたいと思った」という問いでは、９６％以上が同様に回答していました。

私もこのワークショップに同席しその様子を拝見していましたが、ある地域代表者が「これまで学校に任せきりになっていたこともあり、家庭や地域全体でもっと学校を助けていかなければと思った」と感想を述べ、中学校教員が「学校が抱える悩みを地域の人たちに共有してもらえた。もっと共有して一緒にできることを探していきたい」と感想を述べていたことがとても印象に残りました。

ワークショップの最後に主催者を代表して挨拶し、熟議を通して共有できる「ビジョン」や「アイデア」を生み出していただいたことに謝意を伝えるとともに、学校が地域の人たちと協働して活動することへの手応えを実感したことを述べさせていただきました。

今後、４月からのコミュニティ・スクール導入に向け、学校長や学校運営協議会が掲げる「目標」や「アクションプラン」作りにおいて、今回のワークショップで会得したことがその礎になっていくことを確信しています。ワークショップの実施を通じ、「地域みんなで子供の未来を考える」というテーマ設定は、学校と地域の人たちが協働していく初動段階では大変効果があるものと考えを新たにしています。

平成27年３月

地域とともにある学校づくりに向けて

地域とともにある学校づくりに必要なこと

地域とともにある学校づくりに必要なことは次の３点です。１つ目は、地域でどのような子供を育てていくのか、何を実現していくのかという目標（「子供像」）を共有するために熟議を重ねること。２つ目は、学校運営に地域の人々が参画し、共有した目標に向かって協働して活動することです。そのためには、学校と地域の人々の相互理解と信頼関係の存在が不可欠です。３つ目は、学校のマネジメント力の向上です。校長の強いリーダーシップ・教育委員会の明確なビジョンの存在がカギになります。この３点が「地域とともにある学校づくり」の運営に必要な要素です。次項からこの３点を詳しく説明します。

必要なこと①「熟議を重ねること」

まず必要なことは、関係者が当事者意識を持って「熟議（熟慮と議論）」を重ねることです。そのために関係者が参加しやすい仕組みの構築と題材の提供が必要であり、それらを通じた根気よく丁寧な「熟議」が求められます。関係者がみな当事者意識を持ち、子供たちがどのような課題を抱えているのかという実態を共有するとともに、地域でどのような子供を育てていくのか、何を実現していくのかという目標･ビジョンを共有するために「熟議」を重ねることが大切です。

必要なこと②「協働して活動すること」

学校と地域の信頼関係の基礎を構築した上で、学校運営に地域の人々が「参画」し、共有した目標に向かって「協働」して活動していくことが大切です。そのためには、参加的な取組や学校を支援する取組等を通じたコミュニケーションの促進、学校から地域の人々への積極的な情報公開が必要となってきます。

必要なこと③「マネジメント力の向上」

学校の組織としての「マネジメント力」向上が必要です。校長の強いリーダーシップのもとに、教職員全体がチームとして力を発揮し、さらに学校と地域の人々をつなぐコーディネート機能の充実など組織的な体制の構築と目指すべき学校運営を実現するため、関係者の努力と取組を引き出す「仕掛け」の存在が大事になってきます。そして教育委員会と教育長及び首長の明確なビジョンと行動が地域とともにある学校づくりを促進していくためには欠かせません。

三鷹中央学園の三校の先生方と CS 委員とが子供たちの学びのために大人ができることをそれぞれの立場で熟議「学園研× CS 委員会 100 人熟議」

「協働の場」という視点

日本の公立学校は、全国どこの地域にもあり、優秀な教職員が配置されており、全国で地域社会を支えるインフラです。地域に根を張り、地域の礎となっている学校は、学校を核とした地域づくりに貢献することが可能です。また、学校の学習課題（例：ふるさと教育、キャリア教育、人権教育、防災教育、環境教育等）は、地域の課題にもつながるものであり、学校づくりと地域づくりが密接に関わっていることを考えれば、学校が地域の課題を解決するための「協働の場」になるという視点も大切になってきます。そして「協働の場」とする際には、単なる学校開放にとどまらず、学校と地域の人々との「協働」の機会を確保するとともに、地域住民主体の運営を基本とすることや学校側の体制を整備することが必要となってきます。

KEY POINT

地域とともにある学校づくりに必要なこと

「熟議（熟慮と議論）」「協働」「マネジメント」を備えた学校運営が鍵

1. 関係者が当事者意識をもって「熟議（熟慮と議論）」を重ねること
2. 学校と地域の人々が「協働」して活動すること
3. 学校が組織として力を発揮するための「マネジメント力」の向上

いまなぜ？「地域とともにある学校づくり」

子供たちが社会で生き抜くための必要な力を育むために

「学校×地域」の協働を進めるために

地域とともにある学校づくりをめざして

パンフレット作成しました！

「学校×協働への道筋
～関係者が語る」など
情報満載！

専門家が作成した「ポイントチェックシート」付き！　あなたの「学校×地域の協働」に向けた基盤をチェック！
他にも「地域とともにある学校づくり」の魅力、必要要件、コミュニティ・スクールなどについて掲載。

地域とともにある学校で学んだこと

地域との関わりを通して進路とじっくり向き合うことができました。

新潟大学２年（岐阜県立可児高校卒）
角野仁美さん

夢ができました。育った地に恩返しという形で貢献することです。

島根県立隠岐島前高校２年
嶋本千聖さん

「地域とともにある学校づくり」に関するお問い合わせ

お問い合わせ先　◎文部科学省　初等中等教育局参事官（学校運営支援担当）付　運営支援企画係
〒 100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
TEL: 03-5253-4111　FAX: 03-6734-3727

本パンフレット及び「地域とともにある学校づくりをめざして」パンフレットに関するお問い合わせ

お問い合わせ先　◎株式会社ノースプロダクション
〒 089-5601　北海道十勝郡浦幌町字宝町 53-26
TEL: 015-576-4678　FAX: 015-576-3772